



「アンゲリア」はギリシャ語で「ニュース・伝言・メッセージ」という意味です。

**教養ブックレット第5弾「大学で英語をやりなおす方法」(仮題)、ただいま準備中!**

教養教育推進センター 副センター長 野村幸弘

今年度から全学共通科目のカリキュラムが変わりました。そのなかでもっとも大きな改革のひとつは、語学の充実です。とくに英語の授業を2倍にしたことは、思い切った変更です。学部からの強い要請もあり、英語での発表や、論文の執筆、そして就職後にも必要とされるため、とにかくこれからの国際化社会の時代に欠かせない科目として、教養教育推進センターでは、英語をこれまで以上に重視しようと考えました。

そしてこの機会に、教養ブックレット・シリーズでも、英語の学習支援ができないかと検討しました。そこで教養教育推進センター内で編集会議をなんとか重ね、英語担当の先生方に編集方針を伝えたくて、岐阜大学の学生が、この大学で英語をどのように学んだらいいのか、と率直に質問してみました。

そこで出された英語の先生方の答えは、非常にシンプルなものでした。

ひと言でいえば、それは「中学英語を完全にマスターすること」です。中学レベルの英語をしっかり身につければ、英語の運用力、応用力がつく、というのです。たしかにその通りかもしれませんが、とはいえ、それは口で言うほど、簡単ではないでしょう。英語にかぎらず、人が何かをひとつ修得するには、そこに膨大な時間とエネルギーを注ぎ込まなければなりません。これは当たり前のことかもしれませんが、要領よく修得することはばかりに目が向いて、意外と見過ごされていることではないでしょうか。

たぶん、多くの学生は、週1、2回の大学の授業で、かろうじて英語とつながっていると思いますが、英語をものにするには、それだけでは不十分です。つねに英語に触れ、英語で話したり、考えたりする時間を意図的に作らなければなりません。ふだんの日常生活のなかで営々と行われている英語への取り組み。大学の授業を起点としながらも、授業以外の時間に、英語とどう向き合い、どう取り組んでいるのか。これこそが問われているのです。

「教養ブックレット・シリーズ」第5弾「大学で英語をやりなおす方法」(仮題)が目指しているのは、学生たちが自らの力でそうしたふだんからの英語の取り組みができるようになるために、具体的な方法やヒントを示し、また英語の先生はもちろん、英語で発表したり、論文を書いたり、英語圏で共同研究されている多くの先生方の体験談を語ってもらい、学生の英語への学習意欲を引き出し、高めようとする事です。刊行は、来年の春を予定しています。

**英語担当非常勤講師との意見交換会を開催しました**

【日時】8月1日(水)11:00~12:00

【参加者】非常勤講師:5名、学内教員:12名、職員:2名

英語担当の非常勤講師の労をねぎらい、教養教育としての英語教育の目的を共有するために意見交換会を開催しました。議論の中では、「社会からは学生のTOEICの点数を見られるが、TOEICの得点を上げるための教育では、学生の英語応用力の向上にはつながりにくい。自学自習の環境を整えることが重要。」という意見が出されました。

**教養教育としての英語教育**

教養教育推進センター 特任准教授 長尾裕子

教養科目は、文字通りの意味で大学生として深い教養を身につけることを目的として開講されており、専門に直結しない科目も多いと思います。しかし、学生時代には不必要に思われる科目も将来何らかの形で人生に関わり、深く影響を与えるものも多いはず。

そんな中、英語はどんな役割を果たしているのでしょうか。語学は実践的な意味合いの占める割合が多い科目で、特に英語は世界共通言語として現在益々重要度を増してきています。大学というアカデミックな環境の中で、深い教養としての英語教育を重視するか、もっと実践的な日常生活で使えるような英語に重きを置くかは、岐阜大学では各先生方に任されています。高校までのように大学受験という大きな目標がある中で英語教育を受けてきた学生達は、大学で教養教育という漠然とした枠組みの中で以前とは違う授業を受けるようになり、その多様性に戸惑うことがあると思います。

岐阜大学では、英語の授業は学部によって若干の違いはありますが、1~2年次に必修科目として開講されています。各先生方が創意・工夫をされ様々な授業が行われていますが、問題点として学生達が授業を選べないということがあげられます。将来あるいは専門で英語が必要となるであろう学生、留学をしたい学生など、学生たちが興味のあることに合わせて自由に開講科目が選択できる仕組みが構築できれば、教養としての英語教育は、学生のニーズに合わせたもう少しフレキシブルなものになるのではないかと思います。

一方で、本年度から英語教育が新しくなり、来年度からは専門教育で必要な英語に結びつくような授業も開始される予定で、時代に合わせて英語教育を変える試みが少しずつではありますが、始まっています。このように柔軟に変革できる特性が教養教育の強みではないでしょうか。

**若手教員のための教養教育ミニワークショップを開催しました**

【日時】9月27日(木)16:00~18:00

【参加者】学内教員:17名、非常勤講師:6名、職員:2名

教養教育に関する意識や授業の工夫を共有するため、自称を含む若手教員を対象としたミニワークショップを開催しました。仮想的な教養科目の学習目標を立てるワークの中で、無知を前提にした自由で活発な議論がなされました。参加者からは、日頃交流の機会が乏しい非常勤講師の方々と教養教育について熱く語り合えたことが有意義だった、という声が聞かれました。今後は、授業方略や成績評価に係わるワークショップを開催する予定です。

**編集後記**

第22号のテーマは「教養教育としての英語教育」といたしました。大学教育の国際化が社会から求められる昨今、英語教育の重要性は今後益々高まることが予想されます。このような変革のときだからこそ、教養教育としての英語教育には、スキルの習得だけでなく、異文化理解を通じた寛容性の涵養などの意義もあることを心にとめておきたいところです(安田)。

教養教育推進センタースタッフ(2012年11月現在)

センター長: 福士 秀人 専門領域: 獣医学(ウイルス学)  
副センター長: 小澤 克彦 専門領域: 哲学、宗教、宗教文化論  
副センター長: 野村 幸弘 専門領域: 西洋美術史学  
副センター長: 安田 淳一郎 専門領域: 科学教育学(物理)

岐阜大学教養教育推進センター

〒501-1193 岐阜市柳戸1-1

TEL: 058-293-2169

E-mail: gjea01008@jim.gifu-u.ac.jp